

ソウル日本文化センター

2007年度は映画で交流
継続した取り組みも好評

文化芸術交流事業の中では特に映画事業に力を入れました。日本をフォーカスして開催された第11回ソウル国際漫画アニメーションフェスティバルでは新海誠監督や細田守監督を招へいたほか、外部機関との連携を推進すべく、KOTRA(大韓貿易投資振興公社)やシネカノン・コリアと共催で日本映画の上映会を開催しました。また、知的交流分野でも、映画『折り梅』を通じた専門家による日韓両国の高齢者福祉を考えるシンポジウムを開催しました。

そのほか、毎年シリーズで開催しているグラフィックデザイン・ポスター展として「横尾忠則ポスター展」を開催、全州ジャ

パン・ウィーク事業の一環として「和太鼓松村組」の公演も行い地方交流を推進しました。

市民青少年交流分野でも、李秀賢氏記念韓国青少年招へい事業参加者のOB・OGによる自発的な同期会開催を支援したほか、青少年の就労支援を行う日韓のNPO交流を実施しました。また、韓国に留学している日本語ネイティブ留学生を中学・高校の日本語授業のゲストとして派遣するプログラムも実施しました。

出版分野では、「国際交流基金ポラナビ著作・翻訳賞」を創設し、アニメーション研究家の金俊煥氏に第1回目の著作賞を授賞しました(→11頁)。



第11回ソウル国際漫画アニメーションフェスティバルで来場者にサインをする新海誠監督(奥)とそのスタッフ



『折り梅』上映後のピョン・ヨンジュ監督との討論会で発言する松井久子監督

北京日本文化センター

2007年5月に、北京市東部の中央ビジネス地区(国貿地区)へ移転し、施設を拡充

2007年は、日中両国政府の合意のもとで「日中文化・スポーツ交流年」に指定され、公式に認定事業となったものだけでも両国で300を超すイベントが行われて、交流ムードを盛り上げました。ジャパンファウンデーションでは、特に中国の若い世代に日本の新しい文化を紹介することを意識して、年間を通じてさまざまな活動を展開しました。4月には、日本文化の発信拠点『ふれあいの場』の第一号を中国内陸部の四川省成都市に開設。白一色にまとめられた斬新なデザインの『ふれあいの場』では、最新の日本の雑誌、マンガ、DVDに触れることができます。7月には『J-Meeting Beijing 2007』と題し、アニメ音楽等に関する講演会とアニ

メ歌手(樹海、牧野由依)のライブと交流会を行いました。さらに、9月から1月にかけて、北京、広州の2都市で、日本の現代美術を総合的に紹介する『美麗新世界展』を開催し、のべ7万名の来場者を得ました。



美麗新世界展の展示会場風景



J-Meeting Beijing 2007

一方、2007年度の日本語能力試験の中国での受験者は20万名を超え、当国における日本語学習熱の高まりを示しています。当センターの日本語教育専門家は、北京のみならず中国各地の教育機関を訪問し、研修会やアドバイスをを行いました。



Close Up

所長
藤田 安彦

中国での2007年度の日本語能力試験の受験者は20万名を超え、日本国内を除いた海外の受験者の約半分を占めています。中国は今、日本語学習ブームと言ってもよいでしょう。若者層を中心に日本および日本語への興味が高まっています。一つの背景には中国に展開中の2万社以上といわれる日本企業の存在があります。そこで働く従業員は1千万名以上ともいわれています。当センターでは、日系企業の社会貢献活動の調査・サポートを行う

とともに、企業とのパートナーシップのもとで文化交流活動を行う試みを拡げています。

また、最近、中国でもネット世論が大きな影響力を持っています。そのため広報活動にホームページを活用すると同時に、中国のインターネットメディアにも積極的に情報を発信しています。

北京日本文化センターは、「若者と地方」をキーワードに、人口13億の広大な中国に対し、大平学校・北京日本学研究センター同窓生や日本人留学生のネットワーク「留華ネット」等これまで培ってきた人的関係を大切にしながら、さまざまな機関・団体との連携をさらに深め、新しい日本文化発信事業や交流事業を推進していきます。

東南アジア総局

築いてきた良好な関係をさらに緊密化 東南アジア総局誕生

2007年4月に東南アジア総局がバンコクに設置されました。総局の業務は、東南アジア地域を対象に、①国際交流基金の事業に関する地域のかつ総合的観点からの方針の策定、企画、調整、②関連機関との連携の推進、ネットワー

クの構築、③国際文化交流の動向に関する情報収集、調査分析、を行うことです。

初年度は、基金の対東南アジア事業推進の指針「日本・東南アジア交流5カ年計画」の原案作成を行いました。また、シンガポール・クリエイティブ・センター立ち上げ調査や、東アジア研究ネットワーク (NEAS) の国際ワークショップ (バンコク、3月) 開催準備に協力したほか、周辺国の調査を行いました。

バンコク日本文化センター

日タイ修好120周年記念行事が 目白押し

2007年は、日タイ修好120周年。オペラシアター・こんにゃく座『ピノキオ』のバンコク、タイ東北3都市とラオスでの巡演、JCDC『踊りに行くぜ!』や沢井箏曲院の公演等、記念事業を数多く実施しました。1月には日本映画祭を8日間開催、1950～60年代の名作10本を上映。

タイの日本語学習者は、7万名。うち3万名が中等教育、2万名が大学 (高等教育) の学生たちです。センターでは教師向け研修・セミナーや教材開発等の支援事業を展開。10カ月の教員養成研修 (タイ教育省との共同事業) では、新たに12名の日本語教師が誕生しました。

タイ全国の日本研究者を結ぶ日本研究ネットワーク (JSN) が第1回総会を開催、100名以上が参加。知的交流では、



水俣再生セミナー (会議場風景)

水俣市から元市長ら3名を招き、環境汚染の苦難をのりこえ国際環境モデル都市を目指す水俣市再生の取り組みを紹介、環境問題が深刻化するタイの関係者の反響をよびました。

ベトナム日本文化交流センター



勝恵美写真展

ハノイ市に新事業拠点オープン

2008年3月10日、日越外交関係樹立35周年記念事業の最初の事業として、ベトナム日本文化交流センターのオープニング式典が開催され、日越の政府関係者、著名な文化人、研究者、教育関係者、メディア関係者等が出席しました。式典には、ベトナム側よりグエン・ティエン・ニャン副首相兼教育訓練大臣、ホアン・トアン・アイン文化スポーツ観光大臣が参加する等、ベトナム側がその関心の強さを示し、両大臣から日越関係を政治・経済のみならず、文化の面での交流を発展させたいとの意思が表明されました。式典では、

日本から参加した峰岸一水氏とタイン・タム氏の日越プロの演奏家による一弦琴演奏が行われました。

日本語教育への支援を中心としつつ、日本とベトナムの相互理解推進のため、事業を展開していきます。



ベトナム日本文化交流センター外観

ジャカルタ日本文化センター

古来より伝わる日本の伝統と現代日本をバランスよく紹介

『ピノキオ』（こんにやく座）、『踊りに行くぜ!!』（JCDN）、ジャズピアニストの『塩谷哲ジャズグループ』等が、インドネシアのほか東南アジア各国で巡回公演を行いました。また、2008年1月からは日本インドネシア国交樹立50周年が始まり、そのオープニングを飾った津軽三味線のジャカルタおよびマカッサルにおける公演や劇団態変の金満里ソロ公演、歌舞伎舞踊レクチャーデモンストレーションのほか、展示関係でも日本の玩具展、「スピリットを写す」展等、伝統から現代の日本文化を紹介する多種多様な事業が実施されました。

日本語分野では、当国派遣の日本語教育専門家と連携して、現地日本語教師の質の向上を目指し、各種教師向け研修会および勉強会を積極的に支援してきました。また、2003年から5カ年計画で進めてきたインドネシアの中等教

育向け日本語教材『にほんご1』『にほんご2』（2004年新カリキュラム準拠）が2007年6月に完成し、各高校への無償配布を開始しました。



教材『にほんご1』および『にほんご2』

そのほか、日本語学習者の学習意欲向上のため、高校生・大学生向け（社会人を含む）の日本語弁論大会の実施や一般日本語講座（中級・上級）を開講しています。

日本研究分野では、研究者間および研究機関間ネットワーク強化を目指した各種事業に取り組み、日本研究協会(ASJI)との共催で、ワンデーセミナーをジャカルタで実施し、若手日本研究者4名による発表が行われました。また、外交に関するセミナーを開催し、研究者間による興味深いディスカッションが行われました。

クアラルンプール日本文化センター

日本マレーシア友好年を記念し 舞台、展覧会等多彩な事業を実施

日マ障がい者共同制作演劇公演『記憶の森』を皮切りに、『ピノキオ』（こんにやく座）、『三人姉妹』（パパタラフマラ）、『3mmくらいズレてる部屋』（珍しいキノコ舞踊団）、『英語落語公演』（大島希巳江ほか）、日マ両国のプロ、アマチュアフルート奏者による『フルートフェスティバル』、『沖縄舞踊公演』（沖縄文化民間交流協会）、『箏オーケストラコンサート』（沢井箏曲院）、『塩谷哲ジャズグループコンサート』等々、日本マレーシア友好年2007の今年は、数多くのイベントを実施しました。舞台芸術のほかにも、キネティックアーティスト

田中真聡個展『時紡 トキツムギ』、『アジア漫画展』、『日マ児童画展』、日マ両国の写真家による『Counter Photography展』と



日マ友好年2007関連企画
珍しいキノコ舞踊団公演

いった展覧会、毎年恒例となった「日本映画祭」や「日本語弁論大会」、マレー半島を縦断して実施した「和風ワークショップ」等、この年に実施した主催・共催事業は70を超えました。

日本語教育の分野では、教育省に協力して実施している中学校日本語教員養成研修の2期生がコースを修了し、各地の普通中等学校に赴任し、現在1期生とともにインターンとして教育にあたっています。



Close Up

所長
下山 雅也

ほぼ3年間をかけた「態変プロジェクト」が、演劇公演『記憶の森』に結実しました。身体障がい者による身体表現を追求してきた「劇団態変」金満里代表とマレーシアの演劇人との出会いから生まれたこのプロジェクトは、全く演劇の経験のない障がい者自身がこれまでこの国になかった新しい表現を作り上演することを目指し、数々の調査、ワークショップ、稽古を重ね、多くの人々を巻き込む波となって進みました。

公演初日を二日後に控えた日の夜、金さんが高熱を發

して緊急入院した事態を受けてスタッフが集まった場でマレーシア人のスタッフが言いました。「Show must go on! 何があっても公演はやろう」。奇跡的に金さんは公演初日当日に退院し、即劇場に駆けつけて舞台上に登場しました。振り返ると、それまで何度も困難にぶつかった時、例えば、計画通りにことが進まない時、黒子（健常者）の確保に苦しんでいた時、考え方の食い違いで空中分解しそうになった時、その度に私たちは同じ言葉をつぶやいていたように思います。

このプロジェクトに携わった障がい者も健常者も、この経験を生かし、その後それぞれの道歩んでいます。これからも決して安易な道ではないでしょうが。

マニラ事務所

日本語教育の現場を豊かにするため積極的に取り組み

フィリピンではここ数年日本語教育熱が高まり、深刻な日本語教師不足に陥っています。2007年7月に念願の図書室兼日本語教室がオープンし、各種の研修事業を通じて人材育成に取り組んでいます。また日本のポップカルチャーへの関心の高まりを受け、図書室では900冊のマンガを配架する等情報発信拠点を目指しています。

日本語を学ぶ学生を中心に日本文化紹介の裾野を広げるために始まり、すでに恒例となった「日本語フィエスタ」(2008年2月)では、市内のショッピングモールを会場に、日本語スピーチやパフォーマンスのコンテスト、和太鼓公演、さらには日本の駅弁展示やフィリピンの食材を用いた全国弁当

コンテストを実施し、のべ7万名もの入場者がありました。また若年層の日本語教育ニーズの掘り起こしのため、模擬授業や日本文化紹介をパッケージにした日本語高校キャラバンもスタートしました。

マニラ以外の地方では、日本映画祭をセブや中部パナイ島のイロイロ、ミンダナオ島のイリガンで実施。現代陶磁器展を北部山岳地方のバギオや中部ネグロス島のドマゲッティで実施しました。またミンダナオ島の大学生を日本へ招へいしたり、女性モスレム・リーダーによるフォーラムを開催して市民青少年交流への支援も行いました。



日本語高校キャラバン



Close Up
所長
鈴木 勉

フィリピンは約7,000の島からなる島国で、文化・言語の多様なハロハロ(ごちゃまぜ)の国です。文化交流の仕事もマニラのみには偏らないよう、日々全国地図を眺めながら構想しています。特に南部ミンダナオ地方は、先住民族やイスラム教徒、そして国内各地から移住したキリスト教徒との争いが絶えず、開発の遅れもあって内戦やテロに苦しんでいます。しかし“紛争の島”にも平和を愛し、伝統文化を誇りとし、新たな創造を試みている人々が多く住んでいます。そうした人々との交流を大切に、

次の世代に伝えてゆきたいと考えています。

フィリピンは移民大国で、現在人口の約1割、800万名が海外に移住ないしは契約労働者として居住しています。日本にも約20万名の在日フィリピン人がいて、在日外国人としては韓国、中国、ブラジルに次いで4番目です。最近では日比経済連携協定が話題となっており、協定発効後には、2年間で1,000名の看護師や介護士がフィリピンから日本へ行く予定です。日本はいま急激な少子高齢化に直面しています。今後はフィリピン等海外からの移住者を受け入れ、多様性を相互に受け入れる日本独自の多民族社会を作り出してゆくことが求められるでしょう。その意味で文化交流や日本語教育がますます重要な仕事になってゆくと確信しています。

ニューデリー日本文化センター

急速に発展するインドへ精力的に日本を紹介

2007年度は日印交流年で、ニューデリー日本文化センターはインドにおける日本の紹介に精力的に取り組みました。8月には安倍首相の訪印も実現し、それに合わせて日本映画祭を開催しました。10月～12月には「消失点—現代日本美術」展(→10頁)をデリー並びにムンバイで行うとともに、桂歌丸師匠による落語公演、俳句講演、ソプラノ歌手の公演、沢井箏曲院による琴公演、津軽三味線邦楽公演等の催しを連続して実施することにより、インドの市民から広く好評を得ました。

日本語教育の分野では、インド中等教育課程の日本語科目について、カリキュラム・テキスト制作、教師養成についての支援を行いました。また、民間の学校や高等教育機関、

企業内教育を含めたインドにおける日本語の学習者数が増加している現状をふまえ、本年度は、昨年度に続き、日本大使館と協力して5月に『第2回全インド日本語教育連絡調整会議』を開催しました。

またジャパンファウンダー「消失点—現代日本美術」展開会式は日本語教育アドバイザー3名を配置し、インドにおける日本語教育をサポートしています。

日本研究・知的交流の分野では、ネルー大学、デリー大学に対してそれぞれ客員教授派遣、図書拡充、修士訪日研修を実施するとともに、10月の文学会議に対しても支援を行う等、日印間の知的交流を促しました。



「消失点—現代日本美術」展開会式

シドニー日本文化センター

日豪交流年で得たモメンタムを活かし
幅広く事業を展開

日本映画祭は、シドニーでも人気が定着。メジャー作品からインディペンデント系まで19作品を上映、観客動員数は6,600名に上りました。そのほか、人間国宝・福田喜重氏による「刺繍」の展示・講演会、「飾り巻き寿司」のデモンストレーション、日豪交流の将来を担う若手・新人アーティストを支援する公募企画展『Facetnate!』の立ち上げ等、伝統文化から現代アートまで多様なアプローチで日本文化紹介を行っています。

日本語教育分野では、NSW州立美術館と共同で製作を進めてきた、同館所蔵の仏像や絵巻物等の美術品を題材と



日本語教師向けの研修会

した中等教育向けの日本語副教材が完成。また遠隔地に住む日本語教師でも参加できるオンライン日本語講座の第3段階を開発・公開したほか、日本語教師向けの研修会の実施や日本語弁論大会の開催等を通じて、日本語教育を支援しています。

さらに、オーストラリア日本研究学会の総会等の国際会議やシンポジウムの機を捉えて、基調講演者の招へい等の協力・助成を行い、オーストラリアにおける日本研究の促進と日豪の研究者のネットワーク形成を支援しました。

トロント日本文化センター

カナダと日本、お互いを見つめる視点を
さまざまな芸術活動を通じて紹介

日本の寒村に滞在し、集落の人々へのインタビューを通じて肖像画を描く活動を行ったカナダ人アーティストヴィヴィアン・リース氏による作品や人々との交流を綴った記録を紹介する展覧会を開催しました。また、「武道の精神」展の開催に併せて、剣術に魅せられたカナダ人作家キャサリン・ゴヴィエ氏が宮本武蔵終焉の地を訪ね、その旅を通して見た武蔵の人生とその人物像について語る講演会を開催しました。一方、カナダ在住の日本人アーティスト武谷大介氏による、カナダと日本の「空」と都市を遠方から見ることで、カナダと日本の大都市で見出される普遍性とそれぞれの都市の特徴を表現する作品展『空 / kara』展を開催しました。

このように、カナダと日本の双方を見つめるさまざまな芸術活動の紹介を行い、多くのカナダ市民や芸術関係者から好評を得ました。

また、カナダ国内各地で行われる各種芸術



ヴィヴィアン・リース氏の展覧会とコンサート

イベントや映画祭等を共催・助成し、地域に根ざした地元の事業で日本文化の多様な側面を紹介しました。

日本語教育の分野では、近年の調査でカナダにおいて日本語学習の機会や学習者の増加が見られており、日本語教育アドバイザーをアルバータ州に派遣する等、カナダ全体の日本語学習機会および学習者の増加と支援に貢献しています。



Close Up

所長
鈴木 雅之

2007年3月に所長として着任したときまず考えたのは、日本の27倍の広大な国土を持つカナダに対して、限られたマンパワー・財源の中、どうすれば最も効果的かつ効率的に文化交流事業を実施していくことができるのか、ということです。ひとつは、トロント事務所開設以来17年にわたり培ってきた日加双方のネットワークをあらためて活かしていく、ということ。また、トロント市の文化的地区にある当センター施設を最大限に活用すること。さらに、スタッフに蓄積された経験と知識を活かした事

業を行うこと。こうしたことを念頭におきつつ、センターの新たな可能性を探っていきたくと考えています。

2007年度には、トロント市主催の大型文化事業『Doors Open Toronto』(5月)や『Nuit Blanche』(9月)に参加したり、アルバータ州のテレビ局を通じて日本語教材『エリンが挑戦! にほんごできます。』を放映したり、モンリオール大学が中心となって早稲田大学ほかと一緒に実施した「モノリス」というインターネットを利用した知的交流事業をサポートする等、新たな取り組みを行いました。また、各種講演会等のきめ細かなイベントを実施することで当センターの利用者層の拡大を図りつつ、カナダ各都市(オタワ、モンリオール、バンクーバー、カルガリー等)の文化交流事業をサポートしました。